



能美電利用者エピソード

◆ 戦時中から戦後間もない頃の思い出



線路は遊び場の思い出

今では考えられませんが、通学時に電車道を歩いても良くて、先生に電車の音がしたらすぐ避けなさいと注意されました。

電車道の草むしりもやりました。釘や針金を線路に置いて潰して遊びました。針金は数字の形にして潰すのが面白かった。危険な遊びでしたが、先生も「注意せいや」という程度の、のどかな時代でした。線路が遊び場でした。

(山田町)

◆ 昭和9年の手取川氾濫で能美一円は大洪水



濁流で流された天狗橋鉄橋



五間堂付近で線路が崩壊

昭和9年7月11日、手取川の大洪水となり、能美線の五間堂付近の線路を崩壊し、線路が水面に浮く状況となりました。当時15歳の少女は、毎日能美電で小松の女学校へ通学していましたが、洪水のため、家に帰ることができず、数日小松市内の旅館で泊まることになりました。梯川以北は湖のごとくでした。10日後、まだ水が引いてない所を国道沿いに松の木に縄をくくりつけて泥水の中を家に帰ったそうです。(石子町)

◆ 大型台風の被害で全線運休

昭和25年石川県を襲ったジェーン台風で(戦後アメリカの影響で、台風の名前は米国人の女性の名前が付けられた)石川県では大変な被害を受けました。当時8歳位の私は、おばあちゃんのお使いで辰口から小豆を湯谷の叔母さんに届けるため能美電で行きました。帰りに叔母さんが私の大好きなお菓子(うずまき)を10本くれ、あまりに美味しかったので電車を待つ間に全部食べてしまいました。

ところが返りの電車は台風でストップしてしまい、叔母さん宅へ戻ろうと思ったが、お菓子を全部食べてしまい怒られるのが怖くて、強風で怖かったけれど必死で辰口の自宅へ向かって

歩き出しました。徳久を過ぎ、開発に来て辰口の明かりが見えたときには何とも言えない気持ちで大変うれしかった。新築中の家が帰りにはつぶれていたのにはびっくりでした。(山田町)

*ジェーン台風は大型台風で、大木が倒れたり、倒壊家屋も多く発生しました。能美電も強風で全線運休となり、通勤・通学者には多大な影響が出ました。

◆ 昭和38年の豪雪で雪に埋もれてしまい運休で大被害



雪の中を走る能美電

電信柱の上まで積もり鶴来では二階から出入りしていました。能美線は全面ストップで各在所から応援部隊が出て線路の除雪をし、貨車に載せた雪を用水や川に捨て線路確保をしていました。当時、運転手だった方も、豪雪で電車が動かず大変苦労したけれど駅近くの住民から、暖かい食べ物の差し入れやら、激励の言葉をもらって、感激したそうです。

佐野にお住まいの方のお話では、豪雪で能美電がストップしたので、夫婦二人で本寺井までソリで行ったとのことです。本寺井から新寺井まで、九谷焼のセールスマンだった夫は重い見本のかばんを持ち、妻は、夫の着替えをかずいて歩いて何とか行ったそうです。二人共汗だくで大変な思いをしたそうです。(佐野町)

*38豪雪は、石川県下に2メートルを越す積雪で能美電は完全に麻痺状態になり、通勤通学の足が無くなり日常生活にも大きな支障を來しました。

◆ 昭和30年後半の電車利用

能美電で金沢へ行く際に、鶴来で石川総線に乗り換えましたが、電車のスピードは石川総線が非常に速かったようです。白山さんへの初詣は除夜の鐘が鳴る前に辰口温泉駅から大勢の人人が順番について乗りました。酔っ払いが多く大変でした。初詣のときは客車が少なかったのか貨物車が連結していました。

新寺井駅から旧国鉄寺井駅での乗り換えは時間が少なく電車が止まるか止まらないうちに降りて走って乗り換しました。帰りは電車に乗り遅れると2時間近く待たねばならないで走りに走ったものです。ただ電車の方が待ってくれることが多々あり助かりました。徳久では小松の学校に通う運賃は徳久→新寺井が30円 新寺井→小松(国鉄)が10円だったと思います。金沢に遊びに行くと、野町駅20時30分の鶴来行に乗らなければ山田に帰ることが出来ず鶴来から歩いて帰ったこともありました。(山田町)

◆ 時刻を知らせた警笛

三ツ屋の墓場のところは、急カーブになっており、電車が通るたびに、大きなきしむ音がしたり、山が出っぱっている所など警笛を鳴らすので、昼上がりの電車、夕方の4時半の電車とか、時計代わりに時刻を知らせる役目をしてくれました。(三ツ屋町)



辰口中学校前を走る能美電

◆ 新聞も運んでいました



加賀福岡駅で車掌さんが配達用の新聞紙を電車から降ろすところ

小学校高学年の児童が新聞配達をしていました。金沢野町駅から乗せられた朝刊、夕刊は鶴来で能美線と金名線に区分され、各駅で車掌さんがホームに下ろしていました。

朝刊ならば朝5時30分に起き、在所の各家庭に配達し、学校が始まる8時までには完了しなければいけませんでした。辰口のような大きな駅では地区取次店の方が各在所ごとに区分けし、配達少年達に渡していました。当時のアルバイト料は1ヶ月一部20円、100軒の家庭に配達すれば月2,000円のバイト代は当時の少年には高収入だったと思います。(三ツ屋町)

◆ 買い物は鶴来

昭和30年頃は鶴来に行けば何でも買えました。小松へ行くことはほとんどなかったと思います。鶴来や寺井へは来丸から乗らず、鶴来は加賀岩内から寺井は辰口温泉駅から乗車し、それぞれ急行や準急が止まった駅で便利だし運賃も安かったからです。(来丸町)

◆ 農産物、陶器を運ぶ



貨物車



湯谷石子付近の引込線

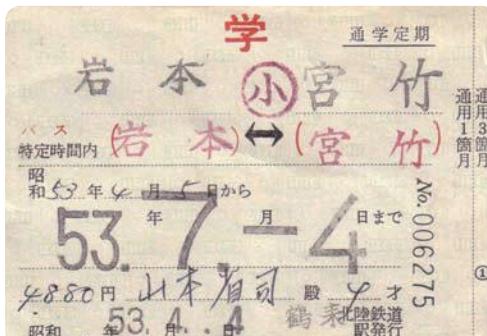
野菜や米はすべて能美電で新寺井まで運び国鉄で全国各地へ運んでいました。当時混合列車と呼ばれ客車の後ろに貨車が連結された車両もありました。貨車には、有蓋車（ワ）と無蓋車（ト）があり、有蓋車には米や肥料を、無蓋車には木材、石炭を積んでいました。井出製陶専用線もありました。

◆遠足の思い出



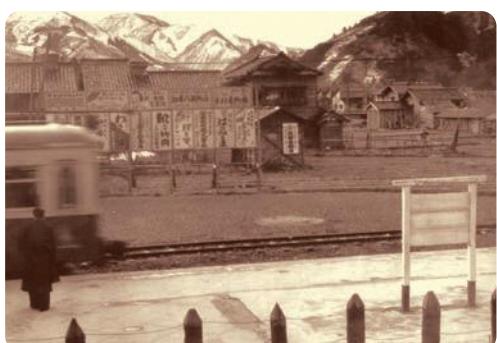
手取遊園地での楽しい遠足

◆金沢方面への利用が多かった



通学定期券

◆通勤時間帯には新寺井ー金沢間の直通便が運行



鶴来駅

学校時代に手取遊園地へ遠足で行きました。鶴来駅まで能美電に乗り、鶴来駅から白山下行きの電車に乗り換えて行きました。

大人になって当時の遠足が懐かしくなって、学校時代の友達と能美電に乗って廃業となった遊園地跡地へ出かけたこともあります。

辰口地区の人はほとんどが鶴来経由で金沢方面へ出かける方が多かったと思います。高校進学も小松と金沢の両方へ進学できましたが、圧倒的に金沢方面へ進学し、ほぼ全員が能美電を利用して通学しました。寺井方面への電車利用は海水浴か、九谷茶碗祭が多かったようでした。（岩本町）

朝の出勤時には、新寺井発鶴来経由で金沢まで行ける急行の直通便があって、この直通便が通勤・通学には大変便利でした。ところが夕方の帰宅時には金沢発新寺井駅までの直通便が無くて、鶴来駅で一旦能美線に乗り換えねばならず、居眠りをして鶴来駅で乗り越して、白山下まで行ってしまい、自宅まで大変な時間がかかった失敗を思い出します。この頃能美線と石川線を総称して石川総線と呼ばれ、能美線の最盛期であったと思います。

◆ 廃線前は昼間時にバス代行



新寺井一鶴来間は1時間に1本程度は運行されていましたが昭和45年4月から、昼間は代行バスになり朝と夕方だけが電車運行でした。

代行バス運行に際し、根上駅では、地元の幼児から運転手さんへ花束が贈呈されました。

◆ 佐野の医者通いで満員

佐野には中田眼科があって、一車両に乗っている全員が目医者に行くようなほどで加賀佐野駅に着くと、車両にほとんど乗客がいなくなるくらいでした。

また、石子には骨接ぎ（整形外科）の名医もいました。佐野に嫁ぐ前、山代から怪我をした妹をつれ、当時の国鉄で新寺井まで来て能美電で加賀佐野まできました。佐野駅には日本通運の営業所があり、リヤカーで石灰を運んだが能美電の従業員は、皆さん親切な人たちで車掌さんが荷降ろしをしてくれました。（佐野町）

◆ 通勤電車利用の思い出

夕方の通勤電車では電車の奥に入ると降りれなくなるので、必死にドアの付近にいました。通学時、男の人から、わざと足を踏まれる意地悪をされて困りました。新寺井駅では柳屋さんでアイスクリームを買い（当時5円）新寺井駅で隠れるようにして食べたものです。（中ノ庄町）

◆ 能美電にも通勤ラッシュがあった

昭和30年頃、冬の電車には暖房も無く寒かったのですが、通勤時には満員の乗客の熱気でぽかぽかと暖かくなって全く寒さを感じませんでした。

仕事帰りのある日には、来丸駅で降りようとしたけれど、満員の人垣の中でなかなか出口扉まで進めず、電車が発車してしまって次の火釜駅まで乗り越してしまいました。逆に大勢の降りる人につられて一つ前の辰口温泉駅で降ろされてしまったこともあります。

また、白山さんへの初詣のときには除夜の鐘が鳴る前に辰口温泉駅から通勤時のような大勢の人で混雑し、酔っ払いが多くて大変でした。

◆ 天狗山トンネルの思い出



天狗岩隋道を出て鉄橋を渡る

夏休みには、田んぼの大きな用水で泳いでいました。用水上に電車線路が敷かれており、泳ぎながら、上を見上げると車体の下が見えて、やはり怖い思いをしました。

トンネルの中には裸電球が灯っていたので、電車の来ない時間帯は格好の遊び場でしたが電車が来る時間には、トンネルを出でいかなければならなかったので、今から思えば随分と怖いことをしていたものだと思います。戦後しばらくトンネル内に入れて最高の遊び場でしたが悪さをするということで入口が閉鎖されてしまいました。

(灯台笹町)

◆ 能美線の追憶



当時の寺井西口駅

小学校低学年の遠足は、行くときは徒歩で、帰りは電車だったと想います。

昭和5年生まれの私も通学、通勤で乗車しました。小学6年の春修学旅行として京都伊勢神宮、二見ヶ浦へ寺井三校合同(寺井・湯野・長野)で行きました。私達は夜10時本寺井発の臨時電車に家族に見送られて新寺井駅へと行きました。JR寺井駅発臨時夜行列車23時発に乗車し(各駅停車)真っ暗な中、駅も街並も今の様

に明るくなく、聞こえるのは時にすれ違う汽車の音、そして明朝5時京都駅に着きました。

小松高女に入学でき最初はバス通学でしたが、ガソリン不足から電車通学となり、一般の人の電車利用 も多くなって1両編成から2両編成になりました。

小さな西口駅も粟生、三道山、吉光方面から利用される人は多くて、西口付近でたくさんの待っている人を見ながら、今日は全員が乗れるか乗れないかもと話のネタにして笑っていました。

2両編成となってとホームが短いもので車掌さんは笛を吹きながら、一辺一辺降りて安全確認の上、五間堂、中庄、福岡と順次乗せて走らなければならないので少しずつ遅れて新寺井に着いたので、国鉄の汽車には改札口も通らず直接ホームへ走って乗る人もいました。汽車に乗れず歩いたこともあります。

(小松市在住の前多花子さん寄稿)

◆ 能美線に赤毛の進駐軍が

私は19歳で北陸鉄道に入社して間もない頃、兄に赤紙がきました。兄は30歳を過ぎていたが、その頃は誰も彼も兵隊に駆り出される状況になっていました。私は、男手が無くて運転手として乗務しました。

千人針をよくやりました。学校帰りにお寺とかに人が立っていて「あんた頼む、あんた寅年やさかい頼む」とよく頼まれた。寅年は、年の数だけ縫うことができると言われました。死線(四銭)超え、苦戦(九銭)を超えると言うことで五銭玉、十銭玉を縫い込んだりもしました。乗務中に空襲警報があって、宮竹の駅に着いた途端に駅長さんから「警戒警報が出たから」と聞いて電車のヘッドライトに黒い布を被せました。回りは真っ暗になり、電柱から次の電柱まで30mもあって、先が見えず怖くて走れなかつたことを覚えています。

岩内や宮竹に軍需工場があって立川から荷物が届いて貨車で運んだことがあります。

寺井西口や寺井には電車道が大きく曲がっていて、電車二両に貨車を付けて走ると重くてスピードが上がらずやっと動いた感じだった。今思うと戦争で男の人がおらなかつたので女ばかりで、よく男勝りのあんな怖いことをしたと思います。

玉音放送は、乗務中だったので聞けなかつたが、駅で戦争が終わつたという話を聞いて「ふーん、そうか」という感じでした。瞬間良かったとか負けて悔いとか頭が回らずただ放心状態になつた気がします。



岩内駅を通過する能美電

天狗山駅(1946年以降廃駅)あたりで、進駐軍を乗せたことがあります。五人程まとまって赤毛で背が高くて怖かつたが、それでも皆笑顔だったので、何かそばに来てしゃべつたけれど、意味がわからないし、そんなに嫌な感じはしませんでした。母親なんかは敵軍が来たら、竹やぶに隠れようかと言って怖がつたけれど、誰かは槍で突かれるぞと言って怖がつたが、私は進駐軍を見てそんな感じはしませんでした。石切の穴等に何か隠していないかを搜索に來たようです。

当時、男性が徴兵で少なかつたので能美電には3名の女性運転者がいました。

(「戦争の頃の辰口の人々」灯台笹町 山下秀子さん寄稿)

◆ 男女出会いの場

結婚前金沢へデートの日、近づく電車の窓からネクタイを締めながら走つて来るフィアンセの姿が見えましたが、電車に乗つて來ても知らん顔していました。当時は恥ずかしく、とても一緒に座ることはできませんでした。姉の話ですが、新婚のころ兼六園に花見にいき、鶴来で乗り換えの際、反対列車(白山下行きと思う)に乗つてしまい、生き別れの状態になつたとの笑話を聞きました。能美電で結ばれたほほえましい話題がたくさんあったようです。

◆ 石子駅の思い出



鳥居付近を通過する能美電

石子の蟻之宮八幡神社には大きな鳥居があつて電車がその横を走っておりましたが、現在は鳥居がありません。これは台風で倒れたそうです。石子のプラットホームには電車の待合所の小屋があり、駅舎はホームを降りたところにありました。駅には貨物の引込線があり井出製陶からの商品を運ぶトロッコが走っていました。湯谷石子駅と加賀佐野駅は九谷焼などの貨物駅もありました。

石子に骨接ぎのうまい人がいて多くの人が石子の駅に降りたが、足が痛いのに(順番を取るために)駅を降りて我先にと走っていったそうです。(石子町)

◆ 日常生活で電車利用

冬場の雪の多いときは、電車は何日も動かず、特に、郵便物が来ないので困って臨時に人夫さんを雇い、人力だけで郵便物を運んでいました。

子どもの頃、夏休みに海水浴に行くのが楽しみで加賀舞子に行くのに能美電を多くの人が利用しました。その時はいつも満員でした。お正月、白山比咩神社に初詣に行く時も満員でした。お花見の時期もそうでした。(上開発町)

◆ 幻の停留場もあった?

70歳後半の人々は、廃線の昭和55年にはすでに廃駅となっていた濁池は記憶にあります。五間堂駅と寺井西口の間(現アルビス辺り)には10軒ばかりの町営住宅みたいなものがあり、その住民のための仮駅のようなものがあったようです。

また、寺井西口と本寺井の間、現在の寺井病院辺りにも駅があったと複数の人の話を聞きました。

小さい頃の能美電の思い出は、田植えが終わったときは父親に連れられ弁当を持って能美電で辰口温泉へ出かけるの楽しみでした。辰口温泉には3軒の温泉宿がありました。家のすぐ横に電車が走り、朝、夕外で遊んでいると満員電車の乗客が見ているので恥ずかしく、家の中に飛び込んで隠れました。(中庄町)



加賀福岡駅を通過する能美電

◆ 坪野から山超えで宮竹駅まで歩いて電車利用



通勤、通学者の車内風景

坪野から金沢の高校へ通学しました。朝7時9分の能美電に乗るために、6時頃に家を出て暗い山道を宮竹まで歩いて行きました。

途中三ツ口駅に電車が見えると間に合いました。鶴来駅で石川線に乗り換え野町まで、更に市電に乗り換え兼六園で下車しようやく学校へ、よく通学したものだと自分ながら思います。

(坪野町)

◆ 加賀佐野駅の思い出

佐野に生まれ育って、昭和33年に大浜町に転居するまでは、佐野駅前に住んでいました。昭和13年に新しい駅舎が完成し、それまで線路横を流れていた石子川の橋を渡ってホームに出たものです。古い駅舎は運送屋の事務所になりました。当時貨物が扱われ、陶器や陶石、木材、石財、石炭、肥料等が出荷、入荷されていたことを記憶しています。

新駅舎には駅業務の出改札口と待合室の外に貨物扱い場所があり、九谷焼を梱包した大きな木箱が何個も毎日のように出荷されていました。貨物扱い場所の床面は、トラックの荷台の高さに合わせていたことを覚えています。待合室には九谷焼の見本棚もありました。

子どもの頃、新聞配達をしていたので、午後5時の電車で運ばれてくる夕刊新聞を受け取り、待合室の床に広げて一部ずつ手早く八つ折りにたたんで配達していました。まだ小学生だったためか、遊び疲れて夕方5時の電車を待つ間に待合室に眠り込んでしまい、新聞の梱包がホームにころがっていたことが何度かありました。

佐野町に住む人はもちろん、旧国府村方面からも利用客があって、通学、通勤、所用に多くの人が利用し、駅前通りは賑わっていました。特に朝の通勤通学時は人の列でした、湯谷石子駅から加賀佐野駅に向う線路のカーブは急で、電車が通ると車輪のきしむ音が高く聞こえ、人の列は一斉に走りだす毎朝でした。

出征兵士もこの駅から送られて行きました。青年団の楽隊と日の丸の小旗に送られ、力強い挨拶をして、電車の窓から見えなくなるまで身を乗り出し手を振って別れた姿を思い出します。

私の父も出征しましたが、戦後「白箱」となって、この駅に帰ってきました。兄はシベリアから昭和24年に帰ってきてこの駅頭で多く出迎えた村人を前に挨拶していました。

能美電は現在の能美市を山から海まで、半世紀余りを走り続け、産業を運び、歴史を訪ね、文化を創出する役割を果たしてくれました。 (老人会「白寿」大浜町 岩田廣美さん寄稿)

◆ 能美線への想い



夜は大正14年に運転を開始して以来、私共の足として、通学、通勤、あるいはお里帰りや商用に使われて参りました能美線のおわかれ会でした。

昭和45年以来、急激にお客が減少して毎年の値上げにも拘らず赤字続きで、合理化をすればする程不便になり、とても通常では乗車できないう様なダイヤで、人の心は離れるばかり、数年前からは昼休みになり、外堀がうめられ段々内堀の所に来て落城が目前でした。何とかならないだろうかと、団地造成も始めたり、色々町の振興に町民の皆様のご努力を戴いたのですが、これがかえってモータリゼーションに拍車をかける事になったようです。ほとんど一人か二人の姿しか見られぬ電車をながめて吐息をつくばかりでした。

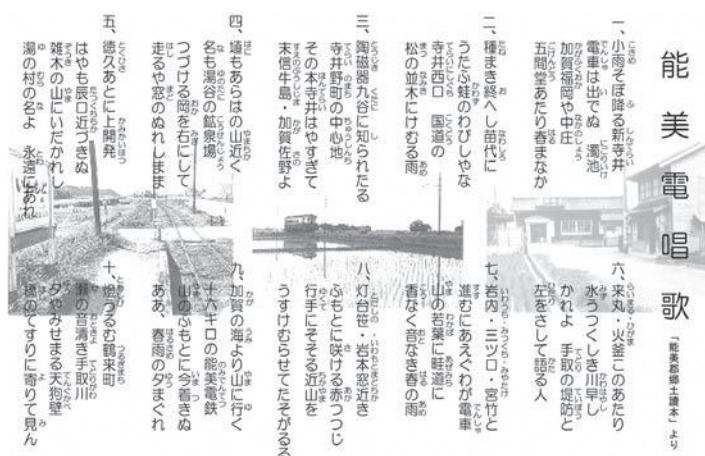
廃止を打出され今更のように慌て、また町民の皆様も何とかと言う事で苦心をした約1年でしたが、県も投げてしまっている匙では、とぼしい我が町財政だけではどうしようもなく、12時前、螢の光の曲で最後のお別れ乗車をして参りました。

長年色々に私共につくしてくれた電車に心からの惜別の情を捧げると共に、町民皆様には心からの思いを述べて、寂しい夜のすぎさった一刻をふりかえっております。

(「広報たつのくち」昭和55年10月号 松崎従成町長「炉ばた」より)

◆ 能美電唱歌の思い出

新寺井から鶴来まで16キロの能美電は昭和55年9月13日を以て廃止されました。駅前に住む私達家族にとって数えきれない程多くの想い出を残して永遠に姿を消しました。朝の一番電車は乗客がきまっていたそうです。そこで一番に乗る方々で一番会と言う会を作っていて、その中には職人あり、サラリーマンあり、商人あり、学生ありでした。主人は毎朝その電車で仕入に行ったのです



「能美電唱歌」は、昭和7年頃に、山先清一元辰口町教育長が作詞し、鉄道唱歌のメロディーで歌われました。

が、一番会の電車は一つの家族のようで、楽しかったと往時を省みて懐かしんでいました。

半世紀をひたすら走りつづけた能美電にこんな一こまもありました。ある朝、上りと下りが徳久駅で交差した時の事です。寺井行の車掌さんが発車の笛を吹いた時鶴来行きの電車がまちがって発車してしまいました。残された鶴来行きの車掌さんが電車の後をせっせと追いかけます。中学生達はおもしろがって手をたたいて笑っています。次の上開発駅で降りる人が降りて乗る人が乗っても合図がないので初めて、車掌さんを忘れて来た事に運転手は気づいたということです。

たくさんの想い出を残してくれた能美電には誰が作ったのか知りませんが新寺井から鶴来までの駅名を詠んだ詩がありました。折にふれては、その詩を口にしたものでした。今でも時々懐かしく思い出しています。

(「徳久の歩み」徳久町 東方芳子さん寄稿)